# 伊達家の歌会（吉村・村倫・重村の和歌）

## ――日本文学科所蔵資料から――

福田安典

近世期の大名の文事として、福井久蔵は儒学、神道、仏教、国学、歴史、地誌、政令と教訓、兵学、科学、本草、和歌、連歌、俳諧、紀行文学、園林文学、戯文、漢文学、漢詩、狂詩、音楽、絵画、書道、茶道、随筆、叢書の項目を挙げる[1]。その広範な世界、付随した諸書収集、臣下への教育、交遊など注目すべき現象が多いが、その解明の遅れを指摘せざるを得ない。本学日本文学科ではその問題意識に立ち、大名の文事として和歌に注目し、伊達吉村、村倫・重村関係の和歌資料を所蔵するに至った（以下「女子大本」）。これらの和歌資料は従来知られていなかった新資料群である。本稿はその報告を中心として考察するものとする。

### 1　伊達吉村

まず関係人物を概観する。伊達吉村は和歌文学辞典類に立項される歌人である。五代仙台藩主、学問は田辺希賢、希文、大島設などに師事し、狩野派に絵画を学び、能は金春流の桜井八右衛門安成に師事し、その方面の著述も多い。和歌は中院通茂、武者小路実陰、竹内惟庸、清水谷実業に就き、実作も多く遺されている。紀行文にも優れていた。

もともと伊達政宗が風流の志が篤く、高田築城の隙に『伊達の松原』『海人の捨草』を編み、「さゝずとも誰かはこえむ逢阪の關の戸うづむ夜半の白雪」が人口に膾炙したことを福井は指摘し、「伊達家は東北の雄藩、京師の文化をうつし植うること年尚しく、祖先に好文の人あり、その後葉に文学を嗜む人多く、歴世祖風をうけつぎて、これを顕彰せんとの傾向は他藩よりも著しきが如し」と述べている。福井は、政宗の孫にして一関藩田村家当主となった建顕、宇和島藩主伊達宗利、『東門歌集』のある仙台藩主綱村の名を挙げた後に、

> その頃仙臺藩に於ては左近中将吉村最もこの道を好み、京師の公卿との交渉もしげく、又田村建顕の歌書を借りてうつせるもののみにても少なからず、中院の拾遺愚草俟段抄などの珍籍もあり、正徳二年には冷泉為綱に請ひ公卿に嘱して仙臺名所歌集を作り

と述べている。渡辺憲司は「田村建顕の志を継承したのは誠顕（福田注：建顕の子、二代目一関藩主）よりも仙台藩第五代藩主伊達吉

村である」として、

吉村は歌会の三年前の元禄十六年（一七〇三）、綱村の跡を襲封し、獅子公と号し田辺希賢等に学問を学び歴代藩主中最も賢君であったと評価されている。

彼が編んだ仙台市立博物館蔵『隣松集』七冊の大名本らしい見事さは、公家たちと大名歌人の作りだした芸術的香気の漂ったもので、大名と堂上歌壇の結実したひとつの頂点を示すがごとき美しさを持っている。

と述べている[2]。女子大本『詠歌大概』はその「大名本らしい見事さ」があるが、次の奥書がある。

右此一帖随政務之暇書寫之加校合畢
元禄十七暦弥生中浣　左近衛権少将藤原朝臣吉村

此本中院前内府通茂公以自筆再令校合者也
宝永元仲冬念四　吉村（花押）

すなわち、元禄十七年に吉村が『詠歌大概』を書写した後に宝永元年になって中院通茂が自筆で校合した本なのである。吉村は『隣松集』に於いても中院通茂以下五名の京都公卿に加点を頼んでおり、この女子大本『詠歌大概』もまさに「公家たちと大名歌人の作りだした芸術的香気」を醸している逸品と言えよう。他に女子大本『松か浦嶋の記』にも「右者中院前内府通茂公入見参歌詞等得概括畢」という識語がある。

吉村以後、宗村、重村、斉村、周宗、斉宗、斉義、斉邦、慶邦の歴代も歌道に精進したことも福井は指摘している。また宇和島伊達家も秀宗、宗利の草創期に桑折宗臣らが中心となって和歌に興じ、中興の祖、村候（号、楽山）を中心とした文化興隆期を迎えた。村候の生母が吉村の娘である。村候、村寿により「宇城和歌御会」が始まり、幕末に宗紀、宗城が歌人として知られるようになった[3]。かたがた以て伊達家の歌学の重層を知ることができよう。

その伊達一族に登米伊達氏がいる。日本女子大学和歌資料の半分はこの登米伊達氏、特に七代当主村倫（むらとも）に関わるものである。登米伊達家は三代当主五郎吉から九代村良に至る七代のうち五名を他家から当主として迎えており、その五名すべてが仙台藩主の子どもであるという、仙台藩と特別のつながりを有する藩であった。村倫は伊達美作村和の子で、養子として登米伊達家七代当主となったが、吉村の子の村勝を八代目に迎えた[4]。村倫は享保十年正月十五日、吉村の前で元服式を挙行し、吉村から諱の一字をもらい伊達相模村倫と改名した。吉村と村倫とのつながりは深いのである。

さて、吉村は単に歌作を嗜んでいただけではなかった。福井は「同族の人例へば伊達村胤の集を撰みてこれに序を附け、又屢々歌会を催し点を加ふるなど専門歌人の如きものあり」と指摘する。女子大本和歌資料には村倫のもとで吉村が開催した歌会の原資料、および処々に吉村の加点や添削が見られることが特徴である。

## 2　吉村主催の歌会、および加点添削

女子大本和歌資料は全六巻、当初から一まとまりの作品だったわ

けではなく、後に和歌懐紙類を編集して六巻に仕立てたようで、両紙の大きさや時代、性格も統一されていない。それでもある程度の編纂姿勢は見られそうである。この六巻は桐箱に収容されている。その箱の裏書に「明治二十三年五月上旬作之」とある。この記述は単に保存箱の制作年代を示すものとも受け止められるし、和歌資料の編纂時期を示唆するものとも考えられるが、憶測にすぎないので本稿では保存箱の制作時期と考えておくこととする。

六巻の内容は以下の通りである。但し巻の数字は整理者が仮に付したものである。

巻一「享保十九年九月晦日御当座御会ニ付読上候御哥共御添削可致」「享保十九年十月十四日菊之御詠草被下置候御返哥ニ被罷上候御詠草」「享保廿年三月貞山様御百年忌御懐旧之題郭公催懐旧と云御題にて御読被罷上候御詠草」「享保廿年乞巧奠御添削相済候御詠草」「享保廿年江戸にて被罷上候名取川之御詠草并淺布ノ御詠草并富塚大門への御返し御詠草」「元文三年詠草　寂照院殿十七回忌追善十首」「元文五年九月十三夜御上御出題并御手前御出題共御添削済候御詠草二通」他

巻二「十首組題」「去年中読置候詠草指上申候事」「去年中指上申候百首三十首詠草御添書ニ付再応指上候御詠」「享保十九年十月十日当座組題之内指上候詠草」「詠十首和歌」「元文弐年屋形様え指上候詠草」「詠十首和歌」他

巻三「乍憚奉伺候覚　九月二日」「乍憚奉伺候覚」

巻四「延享三年正月九日会始」「寛延二年正月九日会始」「六月十五日当座」「八月十六日月見会」「同夜当座」

巻五「九月十三日夜会」他

巻六「安永八年十月廿八日月次会兼題」他

村倫は正徳五年（一七一五）生まれ、享保九年（一七二四）に養子となり、享保十年に吉村の前で元服した。その十七年後の寛保二年（一七四二）に二十八歳の生涯を閉じている。巻四以後は村倫没後の和歌群ということとなる。また吉村も宝暦元年に没しているので、巻六は吉村没後の和歌群である。すなわち、女子大資料は村倫生存中の巻一から巻三、吉村生存中の巻五まで、そして両者没後の巻六に分けて考察する必要がある。

巻一は村倫の読んだ歌に吉村が墨筆で〻点（長点）やミセケチによる添削を施したものである。冒頭は享保十九年九月晦日とあるので村倫が元服して十年、ようやく藩主として風流を理解するようになったのだろうか。以下、元文五年（一七四〇）九月一三日までの詠草類である。巻中に源隆義の和歌および添削も見える。冒頭歌は「河紅葉」の題詠で、

龍田姫錦織らんこのころは波にあやなす瀬々の紅葉は

以下の三首である。吉村は二首目に長点をつけるが、一首目にはない。そして「きこえ候得とも、たつた姫の錦おると申事はこてよみなれ。あまりにふるめかしく候」と批評している。村倫の初心を教導したものとみたい。この龍田姫詠が村倫への初添削とは断じ得ないが、それでも初期の資料であることは間違いないであろう。以後、

村倫歌への吉村の添削が続くが、その一例を挙げておく。

〻置霜にうつろふ菊の花もなを君か情のつゆに色そふ
　　を　かな　此もじ能し　お　はあしく候

〻露はおけと君か恵の露に猶とるより菊の色かそふらん
（「享保十九年十月十四日菊之御詠草被下置候御返哥ニ被罷上候御詠草」）

巻二はすべて村倫の題詠歌に吉村が墨筆で〻点（合点）やミセケチによる添削を施したものである。享保十九年（一七三四）と元文二年（一七三七）の作が確認できる。巻一と同じ村倫の詠であるが、題詠歌を集めた編纂姿勢が見られる。

特筆すべきは巻三である。「村倫君御伺書　吉村君御直書にて御書入　四巻」という付箋が有り、村倫が歌道について吉村に直接尋ね、吉村が朱筆で自筆をもって答えた生々しい資料なのである。四巻とあるが現行は二巻、冒頭に「乍憚奉伺候覚」とあって、一は末尾「右之通恐入候御座候事共品々事多々御座候へは不省憚奉伺候御事／九月二日　村倫上　上」とある（本稿では「第一回伺い」と仮称）二十八条、もう一つは「右之通乍憚至極数多に御座候へは奉伺候御事／正月六日　村倫上　上」（本稿では「第二回伺い」と仮称）とあってやはり二十八条、計五十六条にのぼる。かなりの長文で全容紹介は別の機会に譲るが、一部を紹介する。一つ書きの質問が村倫、それに対する吉村の回答はポイントを落として示した（句読点は適宜付し、用字も一部改めている）。「第一回伺い」には、

一　新敷冷泉家抔方之出題は本歌も証哥も有之間敷事と奉存候。左様之節は時々師匠か先達に尋申事と奉存候。乍然も左様にも不罷成候は、断不読候外ハ罷成不申候と奉存候。
　　たつね候こと及不申。古の題の数をよみ候得てをのつから新作の題もこの題は此心と知候ものに候。中々時々尋よみ候物には御座候。

一　乍如何申上候。廻文之義如何よみ候御事。折句等は読み申候起句何様にもつ、けられ不申御事御伝受も御座候は、奉承知置申度御事。
　　これは昔と違い当時はよみ候ものは哥に能々堪能の人ならてはよみかたきものに候。

一　耳底記ニ物の名の詠格と申候御事御座候。日くらし瀧に而幽齋の可読候節の雑談のうちに相見得申候御事。物の名の詠格奉承度御事。
　　物の名は何にても取入よみ申候。これも当時はよみ候人、堂上にもありかたく御座候。

一　道之記

一　序之類
　　右之義伺候へは前々御挨拶書被成下候は古き集等見可申由奉承知候。序は二十一代集にも有之候。序の類は如何可仕哉。只今御不心得之御事。
　　道の記は道中の事を書記し候。詞書は歌の前書に候。序は書

初の発端ヲ書候か序に候。道の記も書本と板本にてあまたあるものに候。

の如き質疑応答が続いている。村倫がもっとも言及するのは『耳底記』であり、この問答が『耳底記』を模しているのは間違いない。一例を示す。「第一回伺い」の、

一　哉之事。書中申上候事にも無之候へ共、もし奉承知にも罷成候哉と申上候御事。先以　哉　つゝ　之事読得候人無之義故製に御座候哉。また伝受の上、哥学者もよみ申御事に御座候哉　不心得之御事　是も耳底記に　かへる哉　吹なかす哉、中の哉と御座候。一向に存寄も無之不通之御事

これは一向に極秘のてにをはの伝受故私等なとも合点無事に候。

という一条は、次の『耳底記』の記述を踏まえている。

一　哉と申に三あり。三光院殿古今御傳受のとき仰られてきかせられたり。一には中の哉。二にはかへる哉。三にはふきなかす哉也。かへる哉に面白哥あるもの也。かしこまる―中の哉なり。君が代に―かへる哉なり。さくらさく―ふきなかす哉也。あまねく人のしらぬ事。

『耳底記』に於いて「あまねく人のしらぬ事」とあるのを初心の村倫は素朴にも吉村に質したのだが、吉村とて知るはずもなく、「これは極秘のてにをはの伝受なので、私もよく知らない」と答えるしかなく、この遣り取りに大名同士の和歌の添削の実態が覗える。

「第二回伺い」には次のような条がある。

一　証哥には何々の御代まで用候御事。近代にも何有之御歌とも用申候事。通村通茂公抔は是又承知仕候共餘委伺落し申候間奉伺候御事。

証歌には当時の歌にも伝受の人の歌は証拠になり候事に候。

一　八雲御抄にも源氏は本歌とり不申由。尤幽齋聞書の書ニも御座候。乍然おりには取候様に幽齋聞書には相見得申候。とかく不心得の義をし付かたく奉存奉伺候御事。

歌詞ともにとり可申事に候。いかほとも御座候。取様も品々可有事と承候。源氏伊勢ものかたりとてもめつたと取候へは却てとらぬにはおとり申候。

一　物かたりのうちも源氏と伊勢物語計詞歌にも用申候や之御事。外ハ物かたり候ともとり不申候や御事。

さころもの詞よみ申候

さて、「第一回伺い」「第二回伺い」ともに最終条は村倫の和歌への率直な疑問が記される。「御政道」や「人倫」などの語が散見するが、「第一回伺い」の最終条は以下の通りである。

一　哥道と申候と哥を読、御伝授と二様に有之様に奉存候。哥

読候伝受はよみかた等てにはの御伝の御事と奉存候。哥道と得意道によつて人の上の事世の中の事まて哥の道に通申候而人倫の道も明らめ候事と被存候。左様に御座候得は哥を読候も哥道一躰に終は罷成候半御事と奉存不申候御事。若如斯心得候へは入ほかの形入にも御座候と読方之事には無之候へ共奉窺候御事。

伊達騒動の余燼の燻る中に新藩主となった青年の気負いが読み取られよう。この質問に対する吉村の返答はただ「餘り高上に成過候得は却て道の妨なるものに候」だけであった。

### 3　吉村文化圏

巻四、五は吉村の主催した歌会の記録である。多くは人物名の右側に朱字で注記が施されている。年代は「延享三年正月九日会始」「寛延二年正月九日会始」が収められていることから、おおよその成立を予想することができる。それ以外は、六月十五日当座・八月十六日月見会・九月十三日夜会・十月晦日当座・十二月廿五日祝日会とあるのみである。

圧倒的に家臣と一族が多いが、特記すべきと思われる参加者を抜き出してみる。（　）内は、朱字の人物注記をもとに論者が私的に注を施したものである。

伊達家―宗村（吉村の子、六代目仙台藩主）・重村・村勝・村良　他

家臣―田辺希文（上津毛野希文、田邊良輔、仙台藩の儒学者・歴史家・神道家、『伊達世臣家譜略記』）・即休（錦織即休、狂歌師千柳亭綾彦）、源鎮成（牧野権右衛門）、藤原定安（石母田六右衛門）・盛寿（葦名修理）・工藤丈庵（江戸詰藩医、絵師、工藤平助の養父、只野真葛の祖父）他

それ以外、特に文芸との関わりに目を転ずれば、まず連歌師猪苗代兼恵と石井了珍の参加が注目される。伊達家では連歌を重要視していた。「伊達連歌」と称されている。綿抜豊昭に拠れば、そこに関わる連歌の家は政宗の時からの猪苗代家と、忠宗の時からの石井家であって、毎年の七種連歌は両家が交互に務めていた[5]。兼載を祖とする連歌の家・猪苗代家の十一代目が兼郁で、女子大本『松か浦嶋の記』にも「貞州、元定は法橋兼郁にあなひさせ、浪こす末の松山なと見むとて」とあり、古今伝授の家でもあり、仙台藩主に和歌・連歌を教えた。兼恵はその十二代目である。石井家は宗祇の門人であった了派から始まる連歌の家で、了珍は里村家から養子に入っている。中嶋謙昌に拠れば寛延二年（一七四九）に『石井三家系図』を制作しているとのことである[6]。この猪苗代・石井という連歌の家は京の近衛家との交流から伊達家と京都との連絡的役割を果たしたことを綿抜は次のように述べる。

近衛家をはじめとして公家たちにとって伊達家は金銭的、物質的な援助者であり、従って伊達家はその意味で大切な存在であった。一方伊達家にとって近衛家をはじめとして公家たちは、文化的な面の提供者であることは大切なのだが、それ以上に重要なのは、幕府との関係に支障が起きた場合のそれを取り除くための根回先であったことと思われるのである。猪苗代家、石井家の者を京都に住まわせ、文化的なことを中心に公家と交渉

を持たせることは、仙台藩の政治的戦略として重視されるべきではなかったか。

大蔵庄左衛門家十代の経春（秦経春）の和歌は八首も掲載されている。これは歌人として評価というより、吉村と能楽との関係を考える必要がある。吉村は父の綱村の影響で幼い頃から金春流の桜井八右衛門安成に師事、能に精進した。多くの能楽書を残しており、その一部が法政大学能楽研究所に所蔵され、ホームページで公開されている。そのうちの一つ『今春大蔵両家習秘傳之條々』は大蔵庄左衛門九代目経喜から吉村に伝えられたものを、経春へ伝受したと説明されている(7)。女子大本和歌資料はその経春が吉村とともに詠んだ和歌を八首掲載しており、それは経春の伝記として貴重であるのみならず、近世中期における能楽師の和歌活動としても今後活用されたい。一首のみを挙げておく。

夏衣

なつころもひとへにうすき袖にさへたへぬあつさはしのきかねぬる

また、吉村は狩野家に絵画を学んだが、狩野栄川（木挽町家狩野派六代目の絵師）の和歌二首も確認できた。これも一首のみ挙げておく。

たれもみなこよひの空やおしむらむあきも名残の長月のかけ

以上、巻四、五は吉村のおもに江戸藩邸における歌会の参加者の一部をあらあら見てきたが、大名文化圏の一部が垣間見られるものと考える。

## 4　千蔭新資料

巻六は趣が違う。吉村、村倫が鬼籍に赴いた後の興行で、中心となるのが伊達重村である。何より注目されるのがその歌会に橘千蔭が参加していることである。重村は吉村の孫であり、福井によれば「土井利徳、青木一貫、毛利重就、酒井忠以、松平康致、伊達村候の諸侯并に藩士大内義門田邊希文等との唱和多し」「儒学に関する著書も多く」、近衛関白内前、日野資枝、柳原光綱、冷泉為村に点を請うたという。

女子大本和歌資料は「安永八年十月廿八日　月次会兼題」「安永八年十月廿八日　当座」の二つである。ともに重村の主催する歌会であろうと思われる。出席者も伊達村隆、冷泉家や古義堂との関係の深い越後長岡藩主牧野忠精、江戸冷泉派の中心人物・廣通（石乃平蔵）の名が見え、吉村没後の新たな文芸サロンの誕生を窺わせる。

注目すべきはこの歌会に橘千蔭（加藤又左衛門）が参加していることである。このことはすでに鈴木淳が、

同年（福田注：安永八年）十月廿八日、仙台侯伊達重村の歌会に招かれる。『加藤枝直日記』の同日条に、「一、仙台侯へ歌之御会にて、千蔭被為召、昼前より参、夜五時帰、彼是御懇意之御意有之之由」云々とある。」

と指摘している[8]。鈴木は千蔭の父である枝直の日記をもとに記述しているのであるが、今回の女子大本和歌資料に拠ってその実態と詠歌が確認されたのである。千蔭詠は、

仙人のめつてふ菊は冬かけてちいろの秋の色そのこれる

松雪

白雪の積りもやせしと朝な〳〵まつむかはるゝ遠の山端

である。そして巻軸の村隆詠、題は「祝言」。

霜の後もはかへぬ松をためしにてちよ経むやとのさかへをそしる

以上、本稿は日本女子大学日本文学科所蔵の伊達家和歌資料の紹介を中心に論述した。資料の活用とともに近世期大名家の文事、和歌史における大名家歌会の位置づけなどは今後の課題としたい。

**注**

(1) 福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』（原書房、昭和五十一年）、以下、福井とするのはすべて同書に拠る。

(2) 渡辺憲司『近世大名文化圏研究』（八木書店、平成九年）。

(3) 福田安典「伊予宇和島藩の文化と書物」（国文学研究資料館基幹研究『日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉』、平成二十八年）。

(4) 『登米町誌』（平成二年、登米町発行）。

(5) 綿抜豊昭『猪苗代家の研究』（平成十年、新典社）。

(6) 中嶋謙昌「『石井三家系図』の成立―連歌師石井家と東九条荘下司職石井氏」（『京都大学国文学論叢』一二号、平成一六年九月）。

(7) https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/dateke-htmls-201903/lists/list2.html

(8) 鈴木淳『橘千蔭の研究』（平成十八年、ぺりかん社）。

本論文はＪＳＰＳ科研費「近世において文庫を創設・形成した大名に関する総合的研究」（代表：前田雅之、課題番号18H00647）の助成を受けた研究成果の一部である。宇和島伊達文化保存会、登米市歴史博物館の高橋紘氏に格別の配慮を受けた。茲に感謝申し上げる。